

視点、文脈と指標性

—英語指示詞における聞き手への指標詞シフトの現象を中心に—*

澤田 淳
青山学院大学

This paper focuses on the English distal demonstratives *that* and *there*, which deictically refer to things or places near the speaker. The choice of *this* and *that* (or *here* and *there*) is determined not only by purely physical or spatial factors but also by temporal, psychological, textual, and perceptual factors. I argue that *that* and *there* can reflect the speaker's perspective shift to the hearer; by taking the hearer's perspective, the speaker can strongly attract the hearer's attention to the thing or place. The data, on which this paper focuses, sheds new light on 'indexical shifting' in the Kaplanian context.

キーワード： 英語指示詞、直示システム、視点、指標詞シフト、モンスター

1. はじめに

一般に、*this/that* の二系列からなる英語指示詞において、話し手から近い対象は *this*、遠い対象は *that* で指すとされる。確かに次の例では、話し手であるホームズは、自身が手にする（それゆえ、自身から物理的に近い）対象を、*this* を使って指示している。

(1) "There isn't a cat in it, for example?"

"No. What a strange idea!"

"Well, look at this!" He took up a small saucer of milk which stood on the top of it.

(Arthur Conan Doyle, 'The Adventure of the Speckled Band' p. 268)

ところが、興味深いことに、次の例では、話し手であるホームズは、自身が手にする対象（犯人決め手の証拠となる土のかたまり）を *this* ではなく *that* で指示している。

* 本稿は、2012年度日本語用論学会第15回大会で発表した内容に大幅な加筆・修正を施したものである。本稿を改訂するにあたり、3名の査読者の方々から有益で建設的なコメントを頂いた。深く感謝申し上げる次第である。

(2) “But what fresh evidence could you have got?”

“Aha! It is not for nothing that I have turned myself out of bed at the untimely hour of six. I have put in two hours’ hard work and covered at least five miles, with something to show for it. Look at that!” He held out his hand. On the palm were three little pyramids of black, doughy clay. (「これを見てくれたまえ」といって彼は片手をひろげてみせた。手のひらにはピラミッド型の小さな土のかたまりが三つのっていた。) (Arthur Conan Doyle, ‘The Adventure of the Three Students’ p. 604)

(2) におけるような話し手から物理的に近い対象が遠称 *that* で指示される予想外の運用の背景には、どのような意味論的・語用論的要因が関与しているのだろうか。

英語の指示詞研究は、R. Lakoff (1974) による先駆的な研究以降、研究が進められてきたが、日本語の指示詞研究と比べると記述的にも理論的にも十分に成熟した段階にあるとはいえない。空間的に話し手の近くにある対象を遠称指示詞で指示する現象についても、一部の研究でその存在は指摘されているが、¹ その運用メカニズムの解明には至っておらず、多くの謎に包まれている。本稿では、英語の遠称指示詞における予想外の現象に焦点を当て、その現象の背後にある語用論的なメカニズムを探る。

さらに問題の遠称指示詞のデータは、近年の「指標詞」(indexicals)² の語用論研究で理論的焦点の一つとなっている「指標詞シフト」(indexical shifting) (Schlenker 2003 等) の観点から捉えた場合、理論的に極めて重要なデータともなり得る。本稿では、指標詞研究に対して、問題のデータが示す理論的な意義についても触れる。

2. 二種の直示システム

本稿では、指示詞 *this/that* (および、場所指示詞 *here/there*) の直示用法(現場指示用法)には「距離指向システム」(distance-oriented system)と「人称指向システム」(person-oriented system)という二種の直示システム (Anderson and Keenan 1985: 282) が

¹ 話し手の近くにある対象が *that* で指示できる点を指摘した研究として、Fillmore (1971, 1975, 1982, 1997)、国広 (1985)、千葉・杉村 (1987)、竹田 (1994)、Cheshire (1996)、新村 (2006)、Imai (2009)、新村・単・鄭・ハヤシ (2011) 等がある。これらの研究では、漫画等の実例を含む興味深いデータが提示されており、データ面で参考になる部分が多いので合わせて参照されたい。本稿では、筆者が収集した映画、小説、漫画からの実例データを中心に考察するが、これらの先行研究で提示されているデータも一部参考事例として言及する。

² 指標詞は、「指示詞」(demonstratives) (= 指差しを伴う指示詞)と「純粹指標詞」(pure indexicals) (= 指差しを伴わない指示詞、人称代名詞、時間的指示詞 (now など) の総称である (Kaplan 1989 参照)。

関与すると想定する。距離指向システムの下では、this/that は、話し手から対象までの距離が近いか遠いかという、話し手からの（空間的・時間的・心理的な）距離区分を反映する。このシステムにおいては、聞き手が現れてもよいが、その場合、聞き手は、話し手と同じ立場にたち、話し手領域に抱合される（いわゆる「融合型」）。一方、人称指向システムの下では、this/that は対象が話し手領域にあるか聞き手領域にあるかという人称区分を反映する（いわゆる「対立型」）。英語は、聞き手領域を印づける中称の指示詞を持たないため、人称指向システムは日本語ほど明瞭ではないが、図1の例が示すように、聞き手がいけない時には this で指示される対象（すなわち、話し手からごく近距離にある対象）でも、聞き手が触れるなど聞き手のコントロール下にある場合には、その対象は話し手の領域外の対象とみなされ、遠称 that が使われ得る。この時、that は二次的・擬似的に聞き手領域指示のマーカ―として機能する。



図1 人称区分を反映する this/that (『SNOOPY ⑤いつでもいっしょだよ』p. 85)

3. 多様な意味論的・語用論的要因を背景とする that の諸用法

話し手の近くにある対象を that で指示するデータを注意深く観察してみると、そこには質的に異なる幾つかの用法が想定できる。これらの個々の用法の存在は、これまでの研究の記述やデータからも部分的に窺い知ることができるが、英語指示詞の基本システム(2節)と関連づけた用法の体系的な整理はこれまで充分になされてこなかったといえる。本節では、物理的に話し手の近くにある対象を遠称 that で指示する場合、どのような用法の可能性を視野に収めるべきかを整理し、従来不透明であった that の予想外の現象の内実を明らかにする。

3.1. ジェスチャー的対比用法

話し手の近くにある対象が that で指示されている場合、その that は「ジェスチャー的対比用法」(gestural contrastive use) である可能性がある。英語では、同じ程度の近距離にある2つの対象が順番に対比的に示される時、(3)のように、両対象共に this で示され

ることもあるが、(4)のように、後に示す対象は *that* で遠隔化され得る。³

(3) Do you want this one or this one? (Fillmore 1982: 54)

(4) I broke this tooth first and then that one next. (Levinson 2004: 107)

(4) のような *this/that* の対比的な指示用法を、Levinson (2004: 108) に倣い、「ジェスチャーの対比用法」と呼ぶことにする。千葉・杉村 (1987: 139) が提示する次の漫画データにおける *this/that* もジェスチャー的対比用法といえる。

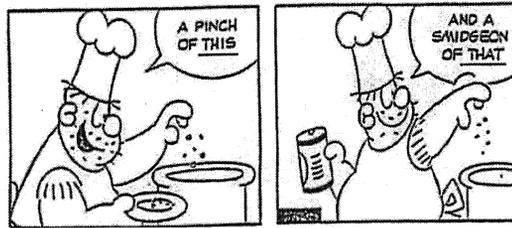


図2 ジェスチャーの対比用法 (千葉・杉村 1987: 139)

3.2. 心理的距離用法

物理的に話し手の近くにある対象が *that* で指示されている場合、その *that* は「心理的距離用法」(Imai 2009: 155) である可能性もある。たとえば、話し手が聞き手からある物を受け取り、聞き手にその代物が何かを問うとする。この場合、*What's this?* と言うのがデフォルトであるが、同じ場面で *What's that?* と言ったとすれば、話し手はその代物に対して心理的な隔たりを置いている (嫌悪感を表出している) ことになる (Lyons 1981: 235, Huddleston and Pullum 2002: 1505)。以下の漫画データも、指示対象に対する嫌悪感の表出が読み取れ、*that* は心理的距離用法の可能性がある。⁴

³ Imai (2009: 151) による2つのコップを使った英語母語話者に対する実験調査の結果によれば、その際の指示の順は *this>that* であり、*that>this* の順はなかったという。この指示の順序制約は、Cooper and Ross (1975: 67) が提示した「Me First」の語順制約 (例: *here and there, this and that, hither and thither, come and go, now and then* 等) に沿うと考えられる。

⁴ 図4の2コマ目の *Look at that, will you?* の *that* も注目される。この *that* の指示対象は (このコマの絵からは明確には判断しにくい) が話し手が手にする糸くず (風の残骸) を指していると思われ、*that* は「聞き手への視点移動用法」の *that* (4.1 節) と考えられる。

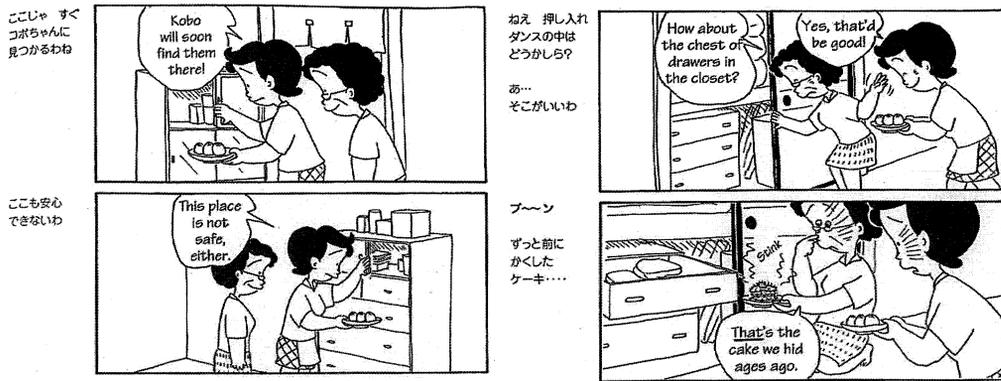


図3 心理的距離用法の that (『対訳よりぬきコボちゃん①』 p. 43)



図4 心理的距離用法の that (『SNOOPY ①行くよ! 今行くよ!』 p. 17)

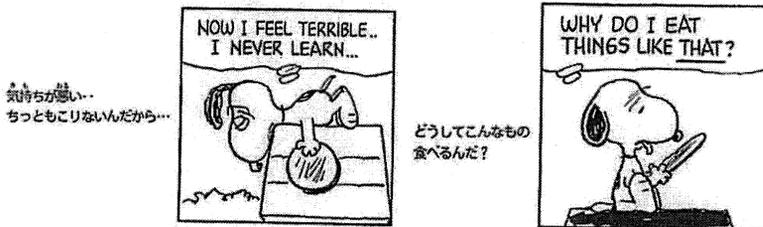


図5 心理的距離用法の that (『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ①』 p. 23)

ただし、話し手が近くにある対象に対して心理的な嫌悪感を抱いていれば、that の選択が義務的となるというわけではない。このことは次のような実例からもわかる。

- (5) ANN: I hate this nightgown. I hate all my nightgowns, and I hate all my underwear too.
(Roman Holiday, p. 22)

3.3. 時間的距離用法

英語指示詞の選択は時間性にも影響される。this は、開始前の事象や進行中の事象を描写する際に、that は、終了後の事象を描写する際に使われる。次の例では、これから缶切

りの使い方を説明する場合には this の使用が、缶切りの使い方を説明した後の場合には that の使用が適切となる (Quirk et al. 1985: 374)。

(6) {This is /That's} how you do it. (Quirk et al. 1985: 374)

次の that も終了直後の事象を指示しており、「時間的距離用法」の that である。⁵

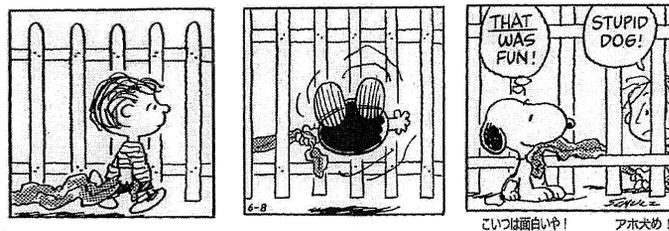


図6 時間的距離用法の that (『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ⑬』 p. 144)

日本語の場合、終了直後の事象は、近称コ（現場指示用法）で表され、現場から完全に切り離された段階ではじめて遠称ア（記憶指示用法）で指示できる。

時間的距離用法の that は、話し手が手にする対象を指示する状況でも出現する。



図7 時間的距離用法の that (新村 2006: 37)

⁵ 本稿では、時間的距離用法の that は、次のような長期記憶内の対象を指示する記憶指示用法（観念指示用法）(recognitional use) の that とは区別されると想定しておく。

(i) Do you remember that holiday we spent in the rain in Devon? (Levinson 2004: 108)

新村 (2006) が提示する上の図7の漫画データでは、主人公のベティが本を手にしなが
ら、その本を *that* で指示しているが、これは、ここでの本が読み終えた対象として認識
されているからに他ならない (ここでの動詞の時制が過去形で表されている点も注目され
る) (新村 2006: 37 参照)。話し手が手にする対象が *that* で指示されている場合、このよ
うな時間的距離用法の *that* の可能性もあるのである。

次の漫画データに出現する *that* も時間的距離用法の *that* とみなし得る。



図8 時間的距離用法の *that* (『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ①』 p. 138)

3.4. 前方照応用法

英語では、談話に登場した既出の対象であれば、たとえその対象が眼前の現場にあつても照応的に指示できる。すなわち、英語では、日本語のような「直示優先の原則」(金水 1999: 76) は認められない。⁶ 次の *that* は、直示と解せば現場内のネックレスを指していることに、照応と解せば既出の名詞句を指していることになり曖昧である。

(7) A: Look at the necklace she's wearing.

B: That's the one I gave her. (Huddleston and Pullum 2002: 1506)

話し手が手にする対象が談話上、既出の要素である場合、その対象を指示する *that* は「前方照応用法」である可能性もある。次の例では、話し手が手にする二ギニーの金貨 (指示対象) は既出の要素であるため、*that* は前方照応用法である可能性がある。

⁶ 英語と異なり、日本語では、現場内に存在する対象は、談話上、既出の要素であっても、基本的に照応ではなく直示で指し示すことが優先される (金水・田窪 1992、金水 1999)。

(i) A: あの建物は何かですか。

B: {あれ/*それ} は国会議事堂です。 (金水・田窪 1992: 145)

井上 (2012: 686) が指摘するように、日本語で現場にある対象を照応のソで言及できるのは、次のように、話し手が現場指示を行うことを放棄する場合に限られる。

(ii) (A、B から少し離れたところに肖像画がある)

A: あれはベートーヴェンだよ。

B: (あきれてため息をついて) それは モーツァルト。 (井上 2012: 687)

次も類例である (右下4コマ目の「それ」の使用に注目)。

- (8) “Two guineas!” roared Merry, shaking it at Silver. “That’s your seven hundred thousand pounds, is it? (...)” (「二ギニーだとよ」とメリーは怒鳴り、その金貨をシルヴァーの鼻先でふりまわした。「これがてめえの約束した七十万ポンドなのか。(略)」)

(Robert Louis Stevenson, *Treasure Island*, p. 181)

次の that も the weird creature に置換可能であり、前方照応用法である可能性がある。



図9 前方照応用法の可能性の that (『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ⑱』 pp. 90-91)

3.5. ジェスチャー的対比用法、心理的距離用法、時間的距離用法と距離指向システム

このように、話し手の近くにある対象を指す that には、様々な意味論的・語用論的要因を背景とした用法がある。⁷ このうち、ジェスチャー的対比用法、心理的距離用法、時



図i (「ののちゃん」『朝日新聞』2014年3月26日、朝刊)

この種の照応のソは、近藤 (2000: 544) のいう「打ち消し問答における「それ」の形で現れる特徴を持っており、「それ」が指すのは、眼前の事物(名詞要素)ではなく、補文(準体)構造として加工された相手の発話である。

⁷ ただし、複数の要因(後でとりあげる「聞き手への視点移動」も含む)が競合した場合、どの要

間的距離用法は、指示対象が言語文脈とは独立に存在することから、照応ではなく直示（拡張的な直示）とみなし得る。ここで重要なことは、これらの直示用法が基盤とするのは、人称指向システムではなく距離指向システムであるという点である。これらの直示用法は、話し手から対象までの（心理的・時間的・談話的な）遠隔の距離意識が反映されており、聞き手を意識しない内言や独白の中でも現れるからである。

上の *that* の4つの用法は、日本語と異なり、英語では、指示詞選択において、心理的・時間的・談話的な要因が物理的要因に優先され得ることを示す点でも興味深い。

3.6. さらなる直示用法の存在

以上の用法の整理を踏まえて、再度 (2) の *that* を分析してみると、この *that* は上のいずれの用法にも分類できないことがわかる。ここでの *that* の指示対象は、*this* との対比によって示された対象でも、話し手が嫌悪感を示す対象でもなく、また、時間的に遠隔化された（何かを終えた後の）対象でも、談話上、既出の要素でもないからである。上で整理したいずれの用法にも収まらない例をさらに幾つか挙げてみよう。

次は、映画 *Charade* からの例である。アメリカ大使館の事務官であるバーソロミューが、夫チャールズの横領事件に巻き込まれた未亡人レジーに、一枚の写真を見せる。話し手のバーソロミューは、自身が手にする写真を *that* で指示している。

- (9) **BARTHOLOMEW:** Mrs. Lampert, would you look at that photograph and tell me if you recognize anyone please? Just a moment, have a good look.

（「ランパートさん、では、この写真を見て見覚えのある人がいたら教えてください、いいですね？ちょっと待ってください。[虫眼鏡を渡して]よく見て。」

【*that* の発話は、下の映像と対応】

REGGIE: It's Charles! (*Charade*, p. 54)



図 10 映画 *Charade* における *that* の発話映像

次は、小説 *Treasure Island* にある一節である。話し手のシルバーが、聞き手のジム

因が *that* の解釈として優先されるのかについては、現時点では不明である。

に、護身用のピストルを手渡す直前の発話内で *that* が出現している。

(10) “Jim,” he whispered, “take that, and stand by for trouble.”

And he passed me a double-barrelled pistol.

(Robert Louis Stevenson, *Treasure Island*, p. 181)

では、これらの例において、*that* が出現している理由はどのように考えればよいであろうか。説明法の1つとして、問題の対象は聞き手に差し出されていることから、既に対象は聞き手の支配領域に入っているものとみなされ、*that* が使われているのだという説明法が考えられる。この説明法によれば、問題の *that* は「聞き手領域指示用法」の *that* であり、人称指向システム（対立型）の構図通りの運用であることになる。

しかし、この説明法には幾つかの本質的難点がある。1つは、*that* の発話時点では、指示対象は未だ話し手の手にあるという事実である。話し手が手にしている以上、対象は未だ話し手の支配領域内にあると捉えるのが自然であろう（日本語でも、(9)、(10)の例の状況では、聞き手領域指示用法のソは使えない）。

上記の説明法のもう1つの、そして最大の難点は、聞き手に対象が渡らない場合でも *that* が使われ得る事実に対して、自然な説明ができないという点である。(2) はまさにその例である。さらに例を追加しよう（以下の *that* も、上で整理したいずれの用法にも該当しない点を確認されたい）。次は、探偵シャムロック・ジョーンズとその友人ホワッツアップとの対話例である。ジョーンズは、今朝妻が自分の指に巻いた細紐の謎を解こうとしており、その細紐を *that* で指示している（なお、2番目の破線部で示された *that* については、*that knot* を先行詞とする前方照応用法の可能性もある）。

(11) “Wonderful man!” I exclaimed; “already?”

“It is quite simple,” he said, holding up his finger. “You see that knot? That is to prevent my forgetting. It is, therefore, a forget-me-knot. A forget-me-not is a flower. It was a sack of flour that I was to send home!”（「このノット（結び目）がわかるかね？これは忘れ物防止のためだ。（略）」）

(O. Henry, ‘The Adventures of Shamrock Jones’ *Sixes and Sevens*, pp. 205-206)

次は映画 *Citizen Kane* からの例である。ケーンは、スーザンに向けて、両耳を同時に動かすおどけた動作をし、自身のその動作を *that* で描写している。

(12) **KANE:** Look at me. See that?

SUSAN: What are you doing?

KANE: I’m wiggling both my ears at the same time, yeah?

(*Citizen Kane*, p. 130)

次は、映画 *Roman Holiday* からの例である。ポーカーの賭けに勝ったアーヴィングが賭け金（紙幣）を自分の懐へとかき集めながら、それらの金を *that* で指示している。

(13) **IRVING:** Look at that, six thousand, five hundred. Not bad, that's ten bucks. Ah, one more round and I'm gonna throw you gents right out in the snow. (こいつを見てみる、6000 と 500 か。(略))

ALL: Say. Wait a minute... (*Roman Holiday*, p. 36)

次は漫画『コボちゃん』（対訳版）からの例である。母親は、やけどした子供の足を水で冷やしており、自身のその動作を *that* で指示している（右上3コマ目参照）。



図 11 (『対訳よりぬきコボちゃん①』 p. 126)

最後は、映画 *The Wonderful Wizard of Oz* からの例である。魔女が離れた場所にある大きな砂時計を取りに行き、その場所から砂時計の残り時間を少女ドロシーに見せる場面である。魔女は、手にした砂時計を *that* で指示している。

(14) *The Wicked Witch moves toward a big hourglass.* 【左下の映像と対応】

She picks up the hourglass, turning it upside down and pointing to it.

WICKED WITCH: Do you see that? That's how much longer you've got to be alive. And it isn't long, my pretty! 【*that* の発話は、右下の映像と対応】

(*The Wonderful Wizard of Oz*, p. 132)

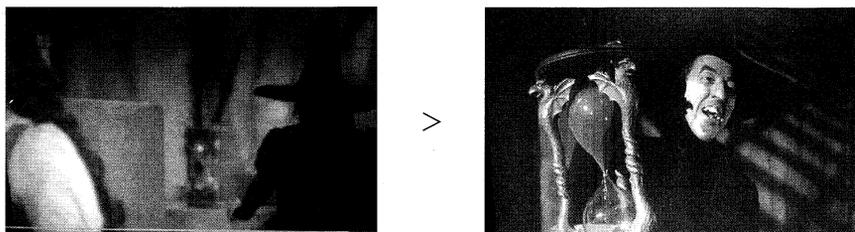


図12 映画 *The Wonderful Wizard of Oz* における対応映像

これまでに挙げたいずれの例でも、指示対象は聞き手には渡っていない。最後の例に至っては、魔女は、聞き手（ドロシー）から10メートル近く離れた場所で砂時計を示しており、対象が聞き手の支配領域内にあると考えることは極めて困難である。

4. 聞き手への視点移動の原則

4.1. 指示詞 *that* における聞き手への視点移動

ダイクシス表現をはじめ様々な言語現象において、「視点」は重要な役割を果たす。ここでいう視点とは、事物や事象を描写する際の話し手の空間的・時間的・心理的な位置（すなわち、視座）のことである。理論言語学（文法理論）において視点の概念が本格的に導入されるのは1970年代頃からであり、文法現象を意味論・語用論を通して説明する生成意味論の立場（ないしは、Chomskyの主流生成文法に与しない立場）の研究に、視点に基づく先駆的な分析が見られる（澤田（印刷中／2014）参照）。

視点が話し手の側にあるか、聞き手の側にあるかの違いが語彙選択の一要因となる現象がある。一例として、代名詞／再帰代名詞の選択を見てみよう。一般に、統語的な束縛領域を仮定する分析では、代名詞と異なり、再帰代名詞は先行詞を自身の束縛領域内に持たねばならず、また、再帰代名詞と代名詞は相補分布をなすとされる。しかし、*picture*、*photograph* 等の「絵画名詞」(*picture noun*)の補部となる前置詞句内では、代名詞、再帰代名詞の両形が現れ得ることが知られている。次の例では、再帰代名詞を構成素統御する先行詞が存在しないが、*yourself*も適格となる。

(15) *Mary drew that picture of {you/yourself}.* (Cantrall 1969: 80)

ここでは、指示詞 *that* の使用から、話し手のみならず聞き手も絵を見ている。絵のモデルが聞き手であると意識しているのが話し手である場合には *you* が選択され、絵のモデルは自分だと聞き手が意識している（と話し手が想定している）場合には *yourself* が選

扱われる。⁸ 視点は、代名詞 *you* が選択された場合には話し手にあり、再帰代名詞 *yourself* が選択された場合には聞き手の側に移動している (Cantrall 1969)。

話し手視点か聞き手視点かの違いは、直示動詞 *come/go (bring/take)* の選択にも反映され得る (Fillmore 1975、澤田 2013)。次の例で *go* は話し手視点、*come* は聞き手視点を表す (この例において、話し手は発話時に聞き手の家 (到着地) にいないものと想定する)。

(16) I {went/came over} to your place last night, but you weren't home.

(cf. Fillmore 1975: 60, 1997: 90)

直示的な空間表現 (*in front of/behind* 等) の選択にも、同様の視点の違いが関与し得る。次は、隠れん坊で隠れている話し手が、鬼である聞き手にヒントを与える時の言い方である。話し手は自身の視点からすれば「木の前」にいるが、聞き手の視点に立つことで「木の後ろ」と表現している (Grundy 2008)。⁹

(17) Behind the tree.

(Grundy 2008: 34)

このような視点の違いは、*this/that* の選択にも反映され得る (後でみる Fillmore 1975、1997 の分析、及び国広 1985 も参照)。本稿では、(2) 及び 3.6 節で挙げた *that* は全て聞き手視点を反映したものと分析する。話し手視点から捉えた場合には、話し手自身が手にする対象は *this* で指示されてしかるべき対象であるが、聞き手視点から捉えた場合にはその対象は *that* で指示される (すなわち、相手からすれば対象は *that* で指示される領域にある) ことになるのである (以下、「聞き手への視点移動用法」の *that* と呼ぶ)。

ここで、(2) 及び 3.6 節で挙げた例で、*that* が生起している構文パターンを示すと、*Look at that!*、*Would you look at that NP?*、*take that*、*You see that NP?*、*See that?*、*Look at that*、*Is that enough?*、*Do you see that?* となる。ここから、以下のような特徴・傾向が指摘できる。第 1 に、*that* は、命令、依頼、確認といった「聞き手との相互行為」を前提とする聞き手指向的な発話の中で現れている。第 2 に、*that* を含む発話文にお

⁸ 次の *picture* は、不定冠詞で導入されていることから、聞き手にとって不定である。聞き手が絵を見ない状況では、絵画名詞の後でも再帰代名詞 *yourself* は不適格となる。

(i) Mary is drawing a picture of {you/*yourself}. (Cantrall 1969: 80)

⁹ テンスの選択にも、話し手視点か聞き手視点かの違いが反映される場合がある。

(i) I hope you {have/had} a good vacation. (Fillmore 1975: 84, 1997: 122)

今、書き手が手紙を読み手が休暇に入る前に書いており、その手紙は読み手が休暇を終えた頃に届くとする。現在形で書いた場合、書き手は自分が手紙を書いている時点に視点を置いていることになるが、過去形で書いたならば、相手が手紙を読んでいる時点に視点移動させたことになる (Fillmore 1975: 84, 1997: 122)。

ける主体（知覚主体）は聞き手である。第3に、聞き手は、話し手と現場（ないしは、直空空間）を共有しており、話し手が提示する対象を知覚できる位置にある。以上のような特徴・傾向を踏まえ、本稿では、次の原則を提示する。

- (18) 「聞き手への視点移動の原則」：現場を共有している聞き手に向けた聞き手指向的な発話においては、話し手は、自身が手にする対象であっても、聞き手の視点に立った遠称指示詞によって指示することができる。

ただし、聞き手指向的な発話内では遠称指示詞の使用が義務的となるわけではない。(1)では、(2)と異なり、近称 *this* が使われており、話し手視点が保持されている。話し手視点を保持した *this* を使うか、聞き手視点に立った *that* を使うかは、ある程度、話し手の裁量に委ねられている。

視点の観点から、さらに次の例を考えてみよう。

- (19) (洋服売り場で、話し手が自身のすぐそばにあるジャケットを指して)
How about {this/that} one? (Huddleston and Pullum 2002: 1505)

Huddleston and Pullum (2002: 1505) によれば、洋服を買おうとしているのが話し手の場合には *this* の使用が、それが聞き手の場合には *that* の使用が好まれるという。この説明に沿えば、*this* の例は、当該の服が自分に似合うかどうかを聞き手に尋ねている発話、*that* の例は、間接言語行為的に当該の服を聞き手に勧めている発話として解釈されやすいことになる。視点に基づく本稿の分析に従うならば、*this* の例は話し手視点、*that* の例は聞き手視点の発話ということになるが、上の *that* の例が聞き手への勧めと解釈されやすいのは、それが聞き手の視点に立った発話だからであろう。

同様に、Fillmore (1975: 84) は、次の例の *that* は、聞き手の視点に立った言い方であるように感じられるとする。筆者の知る限り、話し手の近くにある対象を指示する *that* に聞き手への視点移動が関与し得ることを指摘したのは、Fillmore が最初である（ただし、その出現環境や使用動機などを含めた詳しい考察はなされていない）。

- (20) (患者が痛む歯を自分で指差し、医者にそれを伝える場面)
It's {this/that} one. (Fillmore 1975: 84, 1997: 123)

本稿では、さらに、聞き手への視点移動用法の *that* は、人称指向システムを基盤とする特殊用法であり、距離区分ではなく人称区分が関与した用法であるとみなす。距離指向システムではなく、人称指向システムを基盤とするとみなす根拠として、この用法の *that* が聞き手を意識しない内言や独白の発話の中では現れず、聞き手との対話状況でのみ現れる事実が挙げられる。この点、距離指向システムを基盤とするジェスチャー的対比用法、心理的距離用法、時間的距離用法の *that* と重要な相違をなす。

日本語指示詞は人称指向システムを持つが、話し手領域の対象を（聞き手に視点移動して）ソで指すことはできない。日本語指示詞は、聞き手領域を専用的に指示する中称の指示詞を持っており、その分、英語指示詞に比べ、人称と語形の対応関係がより明瞭である（話し手領域=コ、聞き手領域=ソ）。このことが、日本語において、話し手領域の対象をソで指すといった「柔軟」な運用が阻害される一因となっている。

4.2. 場所指示詞 **there** における聞き手への視点移動

「聞き手への視点移動の原則」は、場所指示詞 **there** の興味深いデータをも自然に説明する。次は、映画 *Roman Holiday* の一場面である。¹⁰ 滞在先の宮廷を抜け出したアン王女は、街角のとある美容院に入る。(21) は、髪をどの長さまで切るかについての理髪師マリオとアン王女の間答場面である。

(21) **MARIO:** What a wonderful hair you have! *Messa in piega?*

ANN: Just cut, thank you.

He takes out his sissors and points to the bottom of her hair.

MARIO: Just cut? Well, then... Cut so?

ANN: Higher.

He moves his hand father up her hair.

MARIO: Higher? Here?

ANN: More.

MARIO: Here!

ANN: Even more.

Mario is frustrated and drops Ann's hair.

MARIO: Where?

Ann grabs her hair right below her ears. (アンは耳の真下の髪をつかむ。)

ANN: There. (ここ。)

【there の発話は、下の映像と対応】

MARIO: There. Are you sure, Miss?

ANN: I'm quite sure, thank you.

(*Roman Holiday*, pp. 88-90)

¹⁰ これと同一箇所のある **there** が千葉・杉村 (1987: 121) でも取り上げられている (ただし、分析はなされていない。以下の分析は本稿の筆者による)。



図13 映画 *Roman Holiday* における *there* の発話映像

注目すべきは、話し手アン王女は、自身の髪を掴みながら、その髪の位置を *there* で指示している点である。ここでの *there* は、先行詞を持たないため、前方照応用法ではない。¹¹ また、ここでの *there* は、次のような直示用法の *there* と異なる。

(22) (状況：B 自身は、自分の肩には触れていない)

A (rubbing B's stiff shoulder) : Where does it hurt?

B: Right {*there*/**here*}.

(cf. Tanz 1980: 71)

(22) では、話し手が物理的に近いはずの自身の肩を *there* で指している。話し手の肩は、今聞き手（医者）が触診によって触れている対象である。それゆえ、話し手は、自身の患部を聞き手の領分とみなし、聞き手領域指示用法の *there* を使っているのである。この状況では、*here* は使えず *there* のみが適格となる。ここから、「聞き手領域指示用法の *there* は、*here* に置き換えることはできない」という一般化が得られる。

では、再度、(21) の *there* を考えてみよう。アン王女が発した (21) の *there* は、*here* に置き換えることができる。よって、上の一般化から、聞き手領域指示用法の *there* ではないことになる。(21) の *there* の発話中に指示対象（髪）に触れているのは、聞き手マリオではなく、話し手アン王女である。すなわち、指示対象は、あくまで話し手が触れている対象であり、話し手の領分（ないしは、支配領域）にあるのである。

では、なぜ、話し手アン王女は、自身が触れている対象の位置を *there* で指示できるのだろうか。ここでも、聞き手への視点移動が関係しているといえる。すなわち、話し手アン王女の視点からすれば、自身が手に触れる対象の位置は *here* で指示されてしかるべき場所であるが（実際、*here* でも適格となる）、聞き手マリオの視点から捉えた場合には、そこは *there* で指示される場所といえるのである。実際、続く次の発話で、マリオは、アン王女が掴んでいる髪の位置を *there* で指示している。

¹¹ 次の *there* の指示対象は話し手が手にする白紙であるが、その対象は談話上、既出の要素でもある。ここでの *there* は前方照応用法の可能性もある。

以上の考察から、問題の *there* が聞き手領域指示用法であるか、聞き手への視点移動用法であるかの判別テストとして、次のテストが提出できる。

- (23) 判別テスト： 聞き手領域指示用法の *there* と異なり、聞き手への視点移動用法の *there* は、*here* に置き換えることができる。

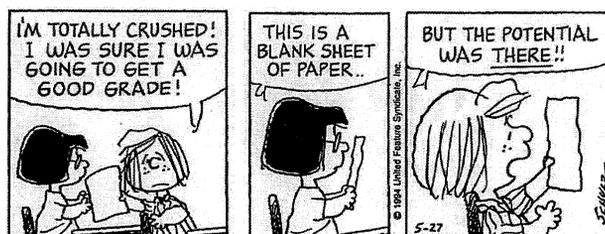
この判別テストから、以下の *there* は全て聞き手への視点移動用法の *there* といえる。

- (24) (話し手が地図上のある都市に指を当て、そこに聞き手の注意を向ける)
 It's right {there/here}. (Fillmore 1971: 224)
- (25) (話し手は自分の体の一部を指して、そこに聞き手の注意を向ける)
 I've got a terrible pain just {there/here}.
 (Huddleston and Pullum 2002: 1549)
- (26) (話し手は契約書の署名欄にペンを当て、聞き手に署名を促す= 図 14)
 Sign {there/here} please.



図 14 Sign there please の発話状況¹²

(26) の *there* は、指示対象である契約書が聞き手の手元にあるため、一見、聞き手領域指示用法の *there* であるかに見えるが、*here* に置き換え可能であるため、聞き手への視



私、すごいショックよ！いい点とれるって確信してたのに！

これは白紙ですよ…

でも可能性がすべて見えるの!!

図 ii 『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ⑮』 pp. 136-137)

¹² 図の URL : <http://www.flickr.com/photos/femkepemke/2894313051/in/photostream>

点移動用法の *there* と見なくてはならない。契約書の署名欄は、話し手がペンで触れており、話し手の支配領域にあるのである。一方、聞き手の手元にある契約書とそこを指し示す話し手のペン（指）との間の距離が離れるに従い、聞き手領域指示用法の *there* の解釈が優勢となり、*there* の *here* への置き換えは難しくなっていく。

4.3. 聞き手への視点移動の動機

では、なぜ、話し手は、わざわざ聞き手の視点に立った指示を行うのであろうか。相手の視点に立った指示は、明らかに有標であり、そうするだけの十分な動機が必要である。本稿では、聞き手の視点に立った指示を行う動機として次のものを考える。

- (27) 話し手が聞き手の視点に立った指示を行う動機は、自身が触れている対象や場所に対して、聞き手の「注意」(attention) を強く引く（または、対象や場所への聞き手の「注意喚起」を強める）ことにある。

実際、3.6 節及び 4.1、4.2 節で提示したデータにおいて、*that/there* は、指示する対象や場所への聞き手の「注意喚起」を強く意図したコンテキストで使用されている。それゆえ、これらの例で指示されている対象や場所は、談話上、話し手のみならず、聞き手にとって（重要な意味を持つ）注目すべき対象や場所として提示されている。

このように考えると、(筆者が収集したデータの範囲からではあるが) 問題の遠称指示詞が、聞き手を知覚主体とする知覚動詞 (look at, see) と共起する例が多い事実も自然に説明される。聞き手からの見えを表す知覚動詞の使用は、指示対象への聞き手の注意喚起を意図する問題の遠称指示詞の運用とよく調和するといえるからである。

ここで、聞き手の視点に立った指示を行う動機として、聞き手との共感や親密さの形成 (ポジティブ・ポライトネス) が考えられるのかについて考察してみたい。本稿では、*that* や *there* の使用が結果的に聞き手との共感や親密さの醸成につながる可能性までは必ずしも否定しないが、聞き手との共感や親密さの形成が聞き手への視点移動用法の *that/there* の積極的な使用動機であるとは考えない。たとえば、(14) で、魔女が *that* を使った動機が少女ドロシーとの共感や親密さの形成にあるとは考えにくい。

5. 指標詞シフトとモンスター

聞き手への視点移動を反映した問題の遠称指示詞のデータは、近年の指標詞研究で理論的焦点の一つとなっている指標詞シフトの現象として捉えることができる。

Kaplan (1989: 511) は、自然言語には指標詞においてシフト (視点移動) を引き起こすオペレーターは存在しないとし、そのような実在性を持たないオペレーターを「モンスター (怪物)」(monster) と呼んでいる。しかし、近年、幾つかの言語において、態度動

詞（とりわけ say にあたる発言動詞）の補文内（間接話法）の環境で指標詞シフトの現象が確認されている（Schlenker 2003、Anand and Nevins 2004、Sudo and Shklovsky 2013 等）。たとえば、以下の例が示すように、ザザキ語（トルコ東部で話されているイラン語群の言語）では、上記の環境内に限り、指標詞（ここでは、I, here, yesterday にあたる語）の視点が主節の主体、場所、時点にシフトした解釈も許される（それゆえ、以下の例は、シフトしない解釈とに潜在的に曖昧となる）。この種の言語では、態度動詞（の補文）がモンスターとなり得るのである（Schlenker 2003）。¹³

- (28) Hesenij (m^{ik}-ra) va ke e^{zj}/k dewletia.
 Hesen.OBL (I.OBL-to) said that I rich.be-PRES
 ‘Hesen said that {I am/Hesen is} rich.’
- (29) Waxto ke ma Diyarbekir-de bime, Hesen mi-ra va ke o ita ame
 When that we Diyarbekir-at were, Hesen.OBL me-at said that he here came
 dina.
 world
 ‘When we were in Diyarbekir, Hasen told me he was born {here/in Diyarbekir}.’
- (30) Hefte nayeraraver, Hesen mi-ra va ke o vizeri Rojda paci kerd.
 week ago, Hesen.OBL me-at said that he yesterday Rojda kiss did

¹³ 指標詞シフトとよく似た現象に、「話者指示的代名詞」（「意識主体照応的代名詞」）（logophoric pronoun）の現象がある（この点については、査読者からのご指摘が有益であった）。話者指示的代名詞とは、間接話法における元話者を指示する代名詞で、人称代名詞と形態上区別される代名詞をいう。たとえば、次のように、西アフリカのエウェ語には、話者指示的代名詞 yè があり、発言動詞の補文内（間接話法）において、三人称代名詞 e と対立をなす。(i-a) の yè は主文主語 Kofi と同一指示をなすが、(i-b) の e は主文主語 Kofi を指すことはできず、Kofi 以外の他の人物を指すことになる（Clements 1975）。

- (i) a. Kofi be yè-dzo.
 Kofi say LOG-leave
 ‘Kofi said that he (Kofi) left.’
 b. Kofi be e-dzo.
 Kofi say 3sg-leave
 ‘Kofi said that he/she (≠ Kofi) left.’ (Clements 1975: 142)

類型論的に、話者指示的代名詞が最も出現しやすい環境は発言動詞の補文内であることが知られているが、これは、指標詞シフトが認可される環境と似ている。それゆえ、人称代名詞の指標詞シフトとして報告されている現象は、話者指示的代名詞の現象である可能性も疑う必要があるが、上でみたザザキ語に関する限り、場所指示詞や時間指示詞におけるシフトも認められることから、話者指示的代名詞の現象とは区別される（もっとも、(29) の場所指示詞 ita に関しては、単純な談話直示の可能性を別に疑う必要があるかもしれない）。

'A week ago, Hesen told me that he kissed Rojda {#yesterday/8 days ago}.'

(Anand and Nevins 2004: 21)

英語 *that/there* に見られる視点移動も指標詞シフトといえるが、この現象が重要な意味を持ち得るのは、従来の主文主体（主文要素）へのシフトではなく、聞き手へのシフトである点にある。ここから、態度動詞とは全く別のモンスターの存在が仮定される。本稿では、聞き手指向的な発話（命令、依頼、等）では、*that/there* において聞き手へのシフトが可能となることを論じたが、聞き手へのシフトに限れば、言語によってはこの種の発話機能がモンスターとなり得ることになる。¹⁴

6. おわりに

本稿では、話し手の近くにある対象や場所が聞き手への視点移動（指標詞シフト）によって、遠称指示詞 *that/there* で指示される現象を中心に考察をおこなった。今後、形式化を施すことで *that/there* のシフトのメカニズムを一層明示化すると共に、英語以外の他の言語の指示詞にも同様の現象が認められるのか調査する必要がある。

今後の考察課題として、さらに、聞き手の近くにある対象を近称 *this* で指す現象が挙げられる。次は映画 *The Sound of Music* の一場面であるが（同一の箇所が千葉・杉村（1987: 121）でも話題とされている）、話し手（大佐）は、自身からやや離れた位置にい

¹⁴ 日本語では、聞き手への指標詞シフトが一人称詞「僕」で確認される（例：[幼い男の子に向かって] 僕、どうしたの？）（鈴木 1973、McCready 2007、田窪 2010、澤田 2014 など）。「僕」におけるシフトも、聞き手指向的な発話で生じるといえる（ただし、子供相手の発話に限る）。指標詞ではないが、「われ／おのれ／自分」などの再帰代名詞も、俗語的（方言的）な例では、「我はなにしとんのじゃ」や「自分はどうすんのや」などのように、対称詞的に使える（田窪 2010: 283）。田窪（2010）は、これらの語は「命令や依頼などの視点操作で聞き手の領域に転換すると聞き手の領域で解釈される」（i）を参照）とし、聞き手指向的な発話環境の中で対称詞的に振る舞う点を指摘している。

(i) 主張：ワレ（話し手領域）＝話し手

命令・依頼：ワレ（聞き手領域）＝聞き手

（田窪 2010: 283）

また、McCready（2007）では、英語のいわゆる「親心の *we*」（*paternal we*）（*we* が *you* の意味で使われる現象）も指標詞シフト現象とみなし、「親心の *we*」は、典型的には疑問文の環境（聞き手指向的な発話環境の一つ）で生じやすい点を指摘している（それゆえ、McCready（2007）は、疑問文が指標詞シフトを引き起こすモンスターとなり得るとする）。

(ii) a. We don't like our spinach. (first person plural *we*)

b. Don't we like our spinach? (*paternal we*)

(McCready 2007)

親心の *we* が疑問文等の聞き手指向的な発話環境で現れるのはその通りであるが、私見では、親心の *we* は、「聞き手包含的 *we*」（*inclusive we*）を基盤にした用法であり、「僕」のような聞き手への指標詞シフト現象とは異なる。

る聞き手（マリア）が着ている服を *that* ではなく *this* で指している（それゆえ、ここでは、聞き手領域が話し手領域と対立した領域としては認識されていない）。¹⁵

(31) **CAPTAIN:** Hat ... off. Sss ... It's the dress. You'll have to put on another one before you meet the children.

MARIA: But I don't have another one. When ... when we enter the Abbey, our worldly clothes are given to the poor.

CAPTAIN: What about this one? 【この *this* の発話は下の映像と対応】

MARIA: Well, the poor didn't want this one.

CAPTAIN: Hmm. (*The Sound of Music*, pp. 26-28)



図 15 映画 *The Sound of Music* における *this* の発話映像

このような *this* による柔軟な運用が排除されないのも、英語指示詞において、人称指向システム（対立型）が二次的・擬似的なものだからであろう。

本稿で取り上げたような指示詞の現象は、発話内部の状況にまで意識的に注意を向けなければ見過ごされやすい現象であり、他言語における調査も進んでいない。本稿で取り上げた現象をはじめとする指示詞の語用論研究は、まだ始まったばかりである。

参考文献

- Anand, P and A. Nevins. 2004. "Shifty Operators in Changing Context." *Proceedings of SALT 14*, 20-37.
- Anderson, S. R and E. L. Keenan. 1985. "Deixis." In T. Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description: Volume 3*, 259-308. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cantrall, W. R. 1969. *On the Nature of the Reflexive in English*. Doctoral Dissertation, Uni-

¹⁵ 査読者から、ここでは、「貧しい人の手に渡って今この場にはない服」との対比で、「マリアが今この場で着ている服」が近称 *this* で指示されたのではないかという趣旨のコメントを頂いた。今後、検討する際の参考にしたい。

- versity of Illinois.
- Cheshire, J. 1996. "That Jacksprat: An Interactional Perspective on English *that*." *Journal of Pragmatics* 25: 369-393.
- 千葉修司・杉村恵子. 1987. 「指示詞についての日英語比較」、『津田塾大学紀要』、19: 111-153.
- Clements, G. N. 1975. "The Logophoric Pronoun in Ewe: Its Role in Discourse." *Journal of West African Languages* 10: 141-177.
- Cooper, W. E. and J. R. Ross. 1975. "World Order." In R. E. Grossman, L. J. San, and T. J. Vance (eds.) *Papers from the Parasession on Functionalism*, 63-101. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Fillmore, C. J. 1971. "Toward a Theory of Deixis." *The Working Papers in Linguistics* 3: 4, 219-242. University of Hawaii.
- Fillmore, C. J. 1975. *Santa Cruz Lectures on Deixis 1971*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Fillmore, C. J. 1982. "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis." In R. J. Jarvella and W. Klein (eds.) *Speech, Place, and Action*, 31-59. Chichester: John Wiley and Sons.
- Fillmore, C. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Grundy, P. 2008. *Doing Pragmatics*. Third edition. London: Hodder Education.
- Huddleston, R and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Imai, S. 2009. *Spatial Deixis*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller.
- 井上優. 2012. 「事態の叙述様式と文法現象—日本語から見た韓国語—」、野間秀樹（編）『韓国語教育論講座 第2巻』、667-689、東京：くろしお出版。
- Kaplan, D. 1989. "Demonstratives: An Essay on the Semantics, Logic, Metaphysics, and Epistemology of Demonstratives and Other Indexicals." In J. Almog, J. Perry, and H. Wettstein (eds.) *Themes from Kaplan*, 481-563. Oxford: Oxford University Press.
- 金水敏. 1999. 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」、『自然言語処理』、6: 4、67-91.
- 金水敏・田窪行則. 1992. 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」、金水敏・田窪行則（編）『指示詞』、123-149、東京：ひつじ書房。
- 近藤泰弘. 2000. 『日本語記述文法の理論』東京：ひつじ書房。
- 国広哲弥. 1985. 「言語学道場 No. 3」、『言語』、14: 3 (3月号)、102-106.
- Lakoff, R. 1974. "Remarks on 'this' and 'that'." In M. Lagaly, R. Fox, and A. Bruck (eds.) *Papers from the 10th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 345-356. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Levinson, S. C. 2004. "Deixis." In L. R. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 97-121. Oxford: Blackwell Publishing.
- Lyons, J. 1981. *Language, Meaning and Context*. Suffolk: Fontana Paperbacks.
- McCready, E. 2007. "Context Shifting in Questions and Elsewhere." In E. P. Waldmüller (ed.) *Proceedings of Sinn und Bedeutung 11*, 433-447. Barcelona: Universitat Pompeu

Fabra.

- 新村朋美. 2006. 「日本語と英語の空間認識の違い」、『言語』、35: 5 (5月号)、35-43.
- 新村朋美・単娜・鄭若曦・ハヤシブレンダ. 2011. 「日本語・中国語・英語の指示語表現にみるダイクシス構造の違い」、『日本認知言語学会論文集』、11: 349-360.
- Quirk, R, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 澤田淳. 2013. 「COME/GOの直示情報と選択システム—直示的中心の下位区分と階層化の視点から—」、児玉一宏・小山哲春(編)『言語の創発と身体性』、359-385. 東京: ひつじ書房.
- 澤田淳. 印刷中/2014. 「視点の文法とダイクシス—文法論と語用論の接点—」、『青山語文』、44: 105-127.
- Schlenker, P. 2003. “A Plea for Monsters.” *Linguistics and Philosophy* 26: 29-120.
- Sudo, Y and K. Shklovsky. 2013. “Indexical Shifting in Uyghur and the Syntax of Monsters.” In S. Kan, C. Moore-Cantwell, and R. Staubs (eds.) *Proceedings of the Fortieth Annual Meeting of the North East Linguistic Society, Volume One*, 151-166. Amherst, MA: GLSA publications.
- 鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』東京: 岩波書店.
- 竹田完次. 1994. 「話し手の近くにある事物を指す指示詞 that に関する一考察」、『筑波応用言語学研究』、1: 33-48.
- 田窪行則. 2010. 『日本語の構造』東京: くろしお出版.
- Tanz, C. 1980. *Studies in the Acquisition of Deictic Terms*. Cambridge: Cambridge University Press.

引用例出典(小説、映画、漫画)

- Arthur Conan Doyle: *The Complete Sherlock Holmes*. London: Vintage Books. 2009.
- O Henry: *Sixes and Sevens*. Charleston: Bibliolife. 1913.
- Robert Louis Stevenson: *Treasure Island*. New York: Penguin Books. 1999.
- 映画: 『名作映画完全セリフ集 スクリーンプレイ・シリーズ 76 サウンド・オブ・ミュージック』『名作映画完全セリフ集 スクリーンプレイ・シリーズ 127 ローマの休日』『名作映画完全セリフ集 スクリーンプレイ・シリーズ 134 オズの魔法使(改訂版)』『名作映画完全セリフ集 スクリーンプレイ・シリーズ 138 シャレード』東京: 株式会社フオーイン.
- チャールズ M. シュワルツ(著)・谷川俊太郎(訳)『SNOOPY ① 行くよ! 今行くよ!』『SNOOPY ③ どうだすごいだろ?』『SNOOPY ⑤ いつでもいっしょだよ』『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ①』『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ⑪』『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ⑬』『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ⑮』『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ⑱』東京: 角川書店.
- 植田まさし(著)・ジュールス・ヤング、ドミニック・ヤング(訳)『対訳 よりぬき コボちゃん ①』東京: 講談社インターナショナル.